

「井伏鱒二著作年表稿」手控え 5

前田 貞昭

はじめに

本手控えは、既発表「井伏鱒二著作年表稿」で対象とした期間（昭和4年～20年）の内で、第一に、新たに初出を確認できたものについて報告すること、第二に、未確認ではあるが新たに得た情報を報告すること、第三に、誤脱・記述の不正確を補綴することの三つを目的としたものである。

本手控え作成に際しては、奥出健氏、東郷克美氏、山内祥史氏、青猫書房から御教示や資料を頂戴した。資料の入手・確認に当たっては、国立国会図書館・日本近代文学館を利用させていただき、兵庫教育大学附属図書館情報サービス係のご協力を賜った。記して感謝申し上げる。

凡例は本号に掲載した「井伏鱒二著作年表稿（大正12～昭和3年）」の凡例と同じである。

下記以外にも、まだ多くの井伏文があろうかと想像している。御教示を戴ければ、追加公表してゆきたい。どのような些細なことでも、〒673-14 兵庫県加東郡社町下久米942-1 兵庫教育大学言語系教育講座 前田貞昭宛てお知らせ下さるようお願い申し上げます。

昭和5年（1930年）

<無題> = 芳箋 = * アンケート回答

女人芸術・3巻7号（7月号）・p.100・7月1日（6月15日）・女人芸術社・窪川稲子（長谷川ヤス）・40銭

「芳箋」（目次には「諸家芳箋」）の見出しに次いで、「三周年を迎えるに当つて、有形無形に御援助下さつた各方面の諸氏に、女人芸術が歩んで来た道についての御批評と、今後の進展に対する御意見をお願いしました。お忙しいところをわざわざ御返事下さいました方々に厚くお礼申し上げます。（編集部）」とある。

*「拝復創刊当時と最近とは編輯傾向が^マ変つて来てゐると拝察致します。三年もつゞいて、よくせきの御努力だと敬伏いたします。」以上井伏回答全文。

<未詳>

換気筒？・2巻1号？・9月？・換気筒編輯所？・野田誠三？・25銭？

『風車』第4巻第6号（1930年9月1日）巻末に「換気筒創刊一周年記念号」の広告があり、その「評論その他」の項に「題未定……井伏鱒二」とあるのによる。現物未確認。

昭和6年(1931年)

犬を連れて男の告白＝めでたきナンセンス＝

週刊朝日新年特別号・19巻1号・pp. 29～30・1月1日(昭和5年12月1日)・朝日新聞社
・大道弘雄・30銭

「井伏鱒二著作年表稿(昭和4年～6年)」(『兵庫教育大学近代文学雑誌』第5号・1994年1月10日)には、表紙・裏表紙に判読できない箇所を残したまま掲出したが、山内祥史氏のご厚意により現物を頂戴したので、印刷納本日付、定価等の新たに確認した情報を付加して再掲する。

<無題>＝準備の研究＝ ＊アンケート回答

サラリーマン・4巻1号(年頭準備号)・p. 99・1月15日(昭和5年12月29日)・サラリーマン社・長谷川國雄・30銭

井伏回答は、目次では、「為すあらんとする青年は如何なる準備が必要か／準備の研究／各方面・各職業に亘り百三十名士・執筆」とする内の「(B) 学者・文士・医師・新聞記者・其他各方面の所見」に寄せられたもの。本文では、「時代の第一線を切らんとする青年大衆は如何なる準備を必要とするか」の内の「(A) 文芸家と成る準備」への回答。本記事の冒頭に、「質問(A) 貴下が現在の職業に入られた理由若しくは動機」、「質問(B) 貴下関係の職業に進まんとする青年はとくに如何なる資格を必要とするか」、「質問(C) 貴下の職業で特に楽しいこと特に苦しいことは如何なることか」という三項目の質問を掲げている。各回答者名の側に見出しが付されており、井伏の場合は「資格不要……」とある。
＊「拝復。私は子供のときから物語や小説を読むことが好きで、さういふ事情から次第に書きたくなつたわけです。／まだ社会的役割といふほどのことをつとめたとは信じません。／素直に書けさうなときはともかく書けさうにないときは悲惨です。／作品を書くには、如何なる資格も必要としなないと思ひます。敬具。」以上井伏回答全文。

<無題>＝中秋の名月＝ ＊アンケート回答

旅行雑誌・7年9号(9月号)・p. 6・9月1日(8月25日)・旅行雑誌社／大立社・高橋信雄・30銭

「井伏鱒二著作年表稿(昭和4年～6年)」(『兵庫教育大学近代文学雑誌』第5号・1994年1月10日)には、現物未確認のまま「中秋の月を語る？」として掲出したが、林眞氏のご厚意により複写を頂戴したので、再掲する。表紙には「中秋の月を語る／文壇諸家」とある。アンケート項目「冠省／九月二十六日は中秋の名月です／一、名月をみるに相応しい景勝地の御存じよりを御聞かせ下さいませんか。／一、また若し風すゞろな夕べ月をめどべく、御出かけになるとしたなら、何処へそして、またどんな方法を御選びでせうか。」＊「一、東京駅のプラッツフオムで、旅に出る客を見送るとき、汽車が出て行つた後に眺める満月。月は屋根の上に出てゐます。近代的な哀愁があるやうです。その他、後略。」以

佐藤春夫氏のこと？

<日本文学大全集月報>？・第9号？・p.3？・10月20日？・改造社？

青山毅「改造社版<日本文学大全集>」（『文学全集の研究』明治書院・1990年5月）による。青山氏の調査によれば、13名の作家の個人全集を集成して刊行された「日本文学大全集」ではあるが、その叢書名は各個人全集のどこにも記されていないという。井伏文は、『佐藤春夫全集』全3巻（1931年10月～1932年6月）の第1回配本の付録の模様。現物未確認。

昭和7年（1932年）

恋愛の散歩（十一）＝連作＝

時事新報日曜付録「漫画と読物」・530号・pp.4～5・1月3日

「井伏鱒二著作年表稿（昭和4年～6年）」（『兵庫教育大学近代文学雑誌』第5号・1994年1月10日）では、仮りに昭和6年12月27日の発行とし、『田園記』（作品社・昭和9年5月15日）所収の「をんな — 通俗女性講座（筆記） — 」本文末尾に「（六年十二月）」とあるので、これに該当するかとも推測を記しておいたが、青猫書房のご厚意により、現物を入手することができた。発行年月日は上記のように昭和7年1月3日であり、また、『田園記』所収「をんな — 通俗女性講座（筆記） — 」とは別文であった。以上二つの推測をここで取り消しておきたい。本「恋愛の散歩道」は、第519号（1931年10月10日）から連載が開始され、第531号（1932年1月10日）に終篇（第12回）が掲載されている（なお、第520号は特輯号「満洲事変画報」で、「恋愛の散歩道」は休載）。毎回、執筆者として浅原六朗以下12人の名前と、「連作小説／懸賞規定」とが掲げられている。「連作小説／懸賞規定」には、「一、一回毎に執筆者が変わるのですから、第何回は誰、と一回毎に執筆者をお知らせ下さい。毎回の正解者を当選者と認め、正解者多数の場合は抽籤で当選者を決めます。」などとする規定が掲げられている。なお、第533号（1932年1月24日）には、「『恋愛の散歩道』—各篇執筆者名発表—」として、所謂新興芸術派を中心とする、各回の執筆者が以下のように公表されている。「一回…龍胆寺雄／二回…久野豊彦／三回…中村正常／四回…辰野九紫／五回…檜崎勤／六回…佐左木俊郎／七回…吉行エイスケ／八回…サトウ・ハチロー／九回…さゝき・ふさ／十回…浅原六朗／十一回…井伏鱒二／終篇…樺山潤」。挿画・関口隆嗣。＊某海軍大将の娘・華嶋類子は、家を飛び出して、男と遊びながら、半分道楽のように丸の内のオフィスに通っている。井伏が担当した第11回では、ホテルに泊まっている類子のところへ、勤め先の社長である川北要蔵から、解雇通知とともに、類子に与えた首飾りを返してくれるようにとの手紙が来る。川北要蔵は夜逃げをし、身を隠している様子である。男の一人から掛かってきた電話に応じている類子のところへ、要蔵を捜して、刑事らしい二人の男が入ってくる。

昭和11年（1936年）

<無題> = 私の好きな夏の景物 = *アンケート回答

話・4巻8号・p. 16・8月1日（7月3日）・文芸春秋社・菊池武憲・40銭

*「溪谷。涼風。山の宿・炉の煙り。滝の音、野鳥の声。昼寝。熟睡。鮎をどつさり釣つた夢。寝ざめの、夢うつつにきく溪流の音。」以上井伏回答全文。

印度短篇集に寄せる

世界短篇傑作全集月報・5号・pp. 1~2・9月<9月16日（9月10日）>・河出書房・
<河出孝雄>

『世界短篇傑作全集』第6巻、第5回配本、佐藤春夫編「支那印度短篇集」の付録。発行・印刷納本日付、発行人は本体奥付による。本体定価1円。月報の刊記は「昭和十一年九月」。巻末広告「世界短篇傑作全集 全七巻」の「予約申込規定」には、「配本期間／昭和十一年四月より毎月一冊宛刊行、十月全七巻完結」、「普及版／四六判・美装／各巻約四五〇頁／仏蘭西式高雅装／定価壹円送料十銭」、「特装版／新菊判・函入・美装／各巻約四五〇頁／有島生馬画伯装幀／定価貳円送料十四銭」とある。このうち、普及版を確認。本書「印度短篇集」の内には、サバルワル訳として、プレーム・チャンドの「まじなひ」「正しき犠牲」「済度の道」が収載されている。井伏鱒二「嘗ての亡命客」（増補版『井伏鱒二全集』第14巻所収。『新潮』1972年3月）には、サバルワルからの手紙が紹介されている。その中に、「以前、自分は日本に亡命中、佐藤春夫さんの斡旋で雑誌『改造』にプレーム・チャンドの三篇のストーリーを日本語訳で出した。それが一九三六年十一月出版の、『世界短篇傑作全集』の『支那印度短篇集』（佐藤春夫編）に輯録された。（この年の二月下旬、サバルワルが満洲に去つてから本が出たわけだ）自分はその本を一冊も持つてゐない。甚だ厚かましいお願いだが、古本屋でそれを捜して送つて頂ければ深甚の謝意を表したい。」と本書に触れている。また、井伏は「正しい犠牲」（『新青年』11巻13号・1930年10月1日）で、本書中の「正しき犠牲」に触れている。*「サバルワル氏の選で印度文学短篇集が刊行されることゝなつた。甚だよろこばしいことだと思つてゐる。私は佐藤春夫氏の紹介で、いまから七八年前サバルワル氏の翻訳の助手をしてゐたことがある。」「印度の文芸批評家たちはプレーム・チャンドを農民小説家だと云つてゐるが、それは好んで農村農民を取材する作家といふほどの意味である。」「プレーム・チャンドの的確な描写はモーパッサンと髣髴するところがあり、モーパッサンとちがつて根底感に正義がある。しかもその正義は諦感によつて痛く洗練されてゐる。さうしてユウモラスなところはチエホフにも似てゐるが、チエホフよりも線が太くて野性味が豊かである。作品によつては東洋的なリズムの盛れあがつたものもある。その昏睡裡においてはプレームチャンドは一箇の詩人である。」

昭和12年（1937年）

棋友－安成二郎氏を訪ねる－

大阪朝日新聞朝刊・19884号・9面・3月2日

パラルビ。＊同じ町内に住む安成二郎の将棋好きの様子を書く。

鎌倉の友－大仏次郎氏の迷惑・早春酔談－

大阪朝日新聞朝刊・19885号・9面・3月3日

パラルビ。＊「一昨々年であつたか」、鎌倉の大仏次郎氏の邸宅を、牧逸馬の自宅と間違えたことがある。酔っぱらっていた「私」は、「私の学生時代の或る親しい級友が或る事情から習作時代の牧逸馬氏のために心を傷つけられ、ひどく銷沈してゐた事件」を思い出し、大仏氏の邸宅に向かって罵倒のことは浴びせてしまったのである。

昭和13年（1938年）

<無題> ＊アンケート回答

<夕刊>やまと新聞・17814号・6月1日（5月31日）・3面

奥出健氏のご教示によって現物未確認のまま「『井伏鱒二著作年表稿』手控え4」（『兵庫教育大学近代文学雑誌』第5号・1994年1月10日）には掲出したが、現物を確認したので、再掲する。なお、「やまと新聞」は夕刊紙。アンケート課題「日支関係の現状を前にして日本のインテリゲンチヤに寄する言葉」。＊「万葉集の言葉を／物部乃臣之壮十者大王任乃随意開跡云物曾（万葉集卷三）」、以上井伏回答全文。

昭和18年（1943年）

三宝洞

新緑・11月15日（11月10日）・pp.6～8・臨時東京第一陸軍病院修養部・梅沢千丸・非売品

東郷克美氏のご厚意により複写を頂戴したので掲出する。＊「私はマライ作戦に従軍中、何に一ばん不自由したかといふと、それは言葉であつた。私はマライ語も支那語もわからない。」「それで敵性語の英語でたいていの用を弁じることにして、英語の話せない華僑相手のときは筆談を交し、英語の話せないマライ人相手のときには通訳を介した。」「或るときイポーといふ町の近くのお寺に行つたとき、私は舌足らずの漢文でお寺の和尚をたいへん狼狽させてしまつた。」それは、三宝洞という鍾乳洞の中に出来た寺であつたが、和尚と別れた後に、日本の

お寺で修行したという「支那人の老齡の尼さん」から日本語で話しかけられた。